

我らの隠れ家 詩篇 142:1-7

2023. 5. 7、丘の上 NO. 699
春日部福音自由教会 山田豊

アンネの日記を読まれた方は多いと思います。ユダヤ系ドイツ人の少女、アンネ・フランクが書いた日記が基になっている本です。もう一つ、オランダ人クリスチャンのコーリーテンブームが書いた「隠れ家」という本(証し)があり、本と共に映画も観たことがありました。二人は、第2次世界大戦中ナチスの目を逃れ、文字通り息をひそめるように隠れて生活をしていたのでした。

本日の聖書、詩篇142篇は、表題をそのまま受け止めると、ダビデがサウロ王の追撃を受け、彼の手から逃げているときのことが背景にあります。彼が逃げた洞穴は、1サムエル22によれば、アドラムの洞窟、24によれば、エンゲディにあるどこかの洞窟か茂みの中であったと思われます。いずれの場所も、サウロ王から命を狙われ、追っ手から身を隠すためにダビデが潜んだところですが、100%安全であると言える場所ではなく、いつも死の恐怖の中に置かれていたことでしょう。

そのような中で、ダビデは叫びます。苦しみの中での彼の祈りは、大きな叫びとなっていたのでした(2,5,6)。声に出すことができず、心の中で叫んでいたのかもしれませんが、沈黙の祈りもありますが、このように叫びとなる祈りもあるのです。人のことを気にせず、あなたの思いを一気に神にぶつけるような祈りもあるのです。彼は自分の命を狙う者に追われ、わなを仕掛けられ、敵の手に陥らないよう、気を抜くことのできない生活のなかで、神の守りと助けを叫び求めていたのです。

私たちが苦しみの中で、呻き叫ぶことがあります。そのような時に、洞窟のように自分の身を隠し、一息つけるような場所を求めます。7節には、「わたしの魂を牢獄から助け出し」とあります。現代の日本は、もちろん自由な社会です。しかし、魂、心が何かに縛られ、魂の牢獄のようなところで呻き叫んでいる人が多くいるのではないのでしょうか。クリスマスの讚美歌、「諸人こぞりて」の第2節には、「悪魔の獄(ひとや)を打ち砕きて、虜を放つ」とあります。イエスキリストが、私たちの魂を捕らえている悪魔の手から助け出し、神の元へと匿ってくださるのです。

ダビデが隠れたアドラムの洞窟には、彼を助ける400人が集まりました。荒野にありながら、水が湧き出るエンゲディは、今は国立公園となつて、人々の憩いの場となっています。われらの隠れ家である神のもと、私たちが助けてくれる人が集まり、憩いの場となるのです。

引用聖句

1サムエル 22:1-2 ダビデはそこを去って、アドラムの洞穴に避難した。彼の兄弟たちや父の家の者はみな、これを聞いてダビデのところの下つて来た。2 そして、困窮している者、負債のある者、不満のある者たちもみな、彼のところに集まって来たので、ダビデは彼らの長となった。約四百人の者が彼とともにいるようになった。

1サムエル 24:1 サウルがペリシテ人を追うのをやめて帰って来たとき、「ダビデが今、エン・ゲディの荒野にいます」と言って、彼に告げる者がいた。

民数 35:10-12

1サムエル 24:2-7 サウルは、イスラエル全体から三千人の精鋭を選び抜いて、エエリムの岩の東に、ダビデとその部下を捜しに出かけた。3 道の傍らにある羊の群れの囲い場に来ると、そこに洞穴があった。サウルは用をたすために中に入った。そのとき、ダビデとその部下は、その洞穴の奥の方に座っていた。4 ダビデの部下はダビデに言った。「今日こそ、【主】があなた様に、『見よ、わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。彼をあなたの良いと思うようにせよ』と言われた、その日です。」ダビデは立ち上がり、サウルの上着の裾を、こっそり切り取った。5 後になってダビデは、サウルの上着の裾を切り取ったことについて心を痛めた。6 彼は部下に言った。「私が【主】に逆らって、【主】に油注がれた方、私の主君に対して、そのようなことをして手を下すなど、絶対にあり得ないことだ。彼は【主】に油注がれた方なのだから。」7 ダビデはこのことで部下を説き伏せ、彼らがサウルに襲いかかるのを許さなかった。サウルは、洞穴から出て道を歩いて行った。

1サムエル 24:22 サウルは自分の家へ帰り、ダビデとその部下は要害へ上って行った。

詩篇 62:8 民よどんなときにも神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ。神はわれらの避け所である。

アドラム (<へ>adullam) アゼカとソコを通過する道路に位置し、北部シェフェーラーからユダの丘陵地帯に至る主要通路の一つを支配していたカナン人の町。ユダはこの地帯のカナン人の町々と友好関係を保ち、アドラムの婦人を妻に迎えている(創 38:1-2)。その背景の中で、ユダとタマルの出来事が起きている。アドラムの王は、イスラエルのカナン入国の際、ヨシュアによって打破された王として列挙されている31人のカナン人の王たちの一人であり(ヨシ 12:15)、アドラムはユダ部族の相続地となった(ヨシ 15:35)。ダビデは、ガテの王アキシシュに保護を拒絶された後、アドラムに近い洞穴にサウルから逃れて身を隠したが、彼の親族や同調者たちも彼に加わり、行動を共にした(Iサム 22:

1-2). この洞穴は、しばらくの間ダビデの本拠地となった(Ⅱサム 23:13 以下, Ⅰ歴 11:15 以下). レハブアムは、西部および北部からユダの丘陵地帯へ侵入する敵に備える防備体制として築いた一連の要塞の一つとして、アドラムの要害を強化した(Ⅱ歴 11:7). 預言者ミカは、アッシリヤ軍のユダ侵略を記述している中で、アドラムについて言及している(ミカ 1:15). またバビロン捕囚から帰還した人々は、アゼカやラキシユなど近隣の町々と共に、アドラムにも再び住むようになった(ネヘ 11:30). アドラムの遺跡は、普通、エルサレムの南西、ラキシユとエルサレムの中間にある、テル・エス・シェイク・マドクールと同一定されている。(新聖書辞典 いのちのことば社)

■エン・ゲディ (<<へ>>en gedi) 「子やぎの泉」という意味。死海の西岸で、南北の



ちょうど中間に位置するオアシスで、石灰岩の裂け目から泉がわき出ると共に、死海水面 200メートルの高さからも滝が落ちて、美しく深い泉をつくっている。ギリシャ・ラテン名は「エンガッディ」、アラビア名は「アイン・ジディ」である。創 14:7 には「ハツアツオン・タマル」という地名が出ており、そこにエモリ

人が住んでいたが、ケドルラオメル連合軍に打ち破られたと記されており、また「ハツアツオン・タマル、すなわちエン・ゲディ」とⅡ歴 20:2 では説明されている。ヨシヤパテの時、モアブ人とアモン人が、エン・ゲディの道を通ってユダに侵入しようとしたという出来事である。しかし、多くの学者は、ハツアツオン・タマルはもっと南の方であるとしている。ヨシ 15:62 では、エン・ゲディは、ユダ部族に与えられたユダの荒野にある町の一つとして数えられている。

ダビデは、サウルの手を逃れてエン・ゲディの要害に身を潜めた(Ⅰサム 23:29, 24:1). ソロモンの時代にはぶどう畑があり、ヘナ樹が栽培された(雅 1:14). エゼキエルに示された幻では、神殿から流れ出した水が川となり、その川には非常に多くの魚が群がり、特に、エン・ゲディからエン・エグライムまで、漁師が網を引く所と言われている(エゼ 47:10). ユダヤ人学者等による発掘の結果(1961—65年)、エン・ゲディは、ダビデ時代(前10世紀)には定住の様子はなく、前7世紀頃に定住が始まったらしいと言う。エン・ゲディの地域の住民は、灌漑による農業を営み、特に豊かな水と温暖な気候は珍しい香料植物を育てるのに適していた。(新聖書辞典 いのちのことば社)